

# 職場における交通安全指導 Part.18

## 中高齢運転者の事故特性と安全指導

### 1. 中高齢運転者の事故の多発傾向化

高齢化社会を迎えた現在、全国的な中高齢ドライバー人口の増加と共に、50歳以上の、いわゆる「中高齢運転者」による事故の占める割合が確実に増加しており(対物事故も同様)、この傾向は、今後益々強まることが予想されます。

本号ではこのような中高齢運転者の事故特性と安全指導について取り上げてみました。

### 2. 中高齢運転者の運転特性と事故の傾向

中高齢運転者の一般的な運転特性については、次のような共通した特徴がみられます。

過去の経験に頼りがちで、運転能力を過信する傾向がある。

加齢と共に自己中心性の傾向があらわれ、ともすると協調性(周囲の車など)に欠ける面がある。

歳を重ねるに従い身体的衰えが進み、それと共に判断力、迅速で確かな操作能力が一般的に低下する傾向があるが、それを自覚していないことが多い。また、自分の体力を過信し、つい無理をしてしまう傾向がある。

ウっかり、ボンヤリ、見落としなどが多い。

以上の特性は、年齢、体力、過去の経験等により個人差がありますが、その特性が事故原因と考えられるケースも少なくありません。

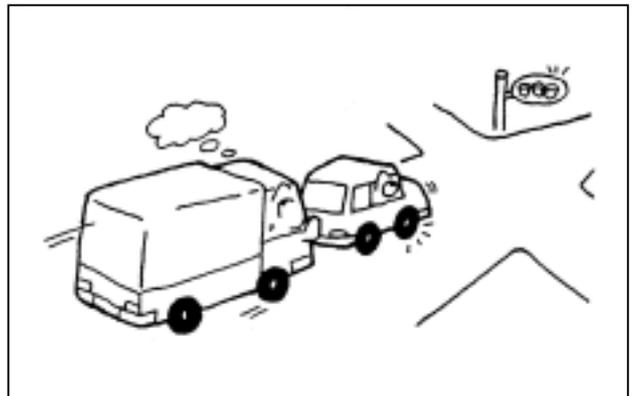
中高齢運転者の交通事故で発生件数の多いものは、「出会い頭の衝突事故」ですが、「追突事故」もほぼ同様の割合で、これに次いでいます。次に多いのが「右・左折時の事故」となっています。

また、違反種別の発生状況でみると、「安全運転義務違反」による事故が5割強を占め、中でも「安全

不確認」、「脇見運転」、「動静不注視」など、いわゆるウっかり、ボンヤリ運転による事故が多いという状況で、次に多いのが「一時不停止」による事故ですが、違反種別においても前段でみてきた事故類型の特徴と符合します。

### 3. 常に気分一新で乗務させる

事例1: A(53歳、男性)は4トン車を運転し、見通しのよい片側二車線道路の中央線寄りを走行中、交差点に差し掛かったところ、考え事をしていため赤信号で停止した前車に気付くのが遅れ追突し、乗用車の運転者を負傷させた。



#### (指導のポイント)

この事故の直接の原因は、ブレーキ痕跡もないことからAの一方的な前方不注視にあったことは明らかですが、後日判ったことは、Aは家庭内での様々な悩み事を抱えており、それらの問題をそのときふと考えてしまったことが、ついぼんやりした運転に繋がって事故を招いてしまったようです。

この年齢層の特徴としては家庭内の様々な問題を抱えているケースが多く、例えば子供の進学や就職問題、あるいは住宅ローン等の金銭的問題、さら

には老後に対する不安等々、このような心配事が、運転中にふと現れると、事例のような考え事をしたり、ぼんやり運転となって事故に直結するケースが以外に多いのです。

この種の事故を防止するために次の点を指導してください。

日頃から運転者とのコミュニケーションを積極的に持つことは勿論、始業点検あるいは出発前に運転者の顔色や言動に不自然なところはないかをチェックし、もし元気がないようであれば相談相手になるなど、不安解消に努め、気分一新した状態で乗務させる。

この年齢層になると疲労回復に時間がかかることから、翌日に疲労が残るような無理な運行計画は極力避け、時間的、距離的にも余裕を持てるよう配慮し、本人に自信がないようであれば絶対に無理はさせない。

#### 4. 右左折時は周囲の状況をよく見る

事例2：B(56歳、男性)は2トンの保冷車を配送業務のため夜間に運転し、交差点を左折したところ、横断歩道を左から出てきた自転車の発見が遅れ接触し、乗っていた高校生を負傷させた。



##### (指導のポイント)

Bは左折することのみに気をとられ、進行方向の左右の安全確認を怠った(自転車の見落とし)ことが、この事故の原因です。

視覚は運転にとって最も重要な感覚です。脳が処理する外部情報の約3分の2は目から入ってくるといわれていますが、高齢になるにしたがって、視機能

は健康な人でも次第に低下してきます。特に夜間視力は著しく減退し、また、反応動作も急に遅れがちとなり不安定になります。

この事例は、このような視機能、反応動作機能の低下にも起因しているものと考えられます。

自分の体力や気力等をわきまえて、余裕を持った運転を心がけるなど、次の点について指導してください。

夜間は、昼間と比べて視認力が極端に低下し、また人間の目は暗さに慣れるまで時間がかかることを認識させる。

中高齢運転者の事故が交差点の右左折時に多発していることを認識させる。

とっさの場合の反応がどうしても遅れがちになるため、速度は控え目に車間距離も意識して多めにとるようにする。

#### 5. その他の一般的指導事項

加齢からくる体力の衰えや運転業務によるストレスを解消するために、余暇の過ごし方を工夫する。例えば、庭いじり、公園を散歩する等。

健康診断の定期的な受診により、自己の健康管理を励行させると共に身体能力の特徴を自覚させる。併せて、年に一回は「安全運転トレーニングセンター」の受講等、安全に対する意識を再認識させる。

運転者に風邪気味の状態で乗務させる場合は、眠気を誘う薬を服用した運転は控えさせる。また、高血圧症に使われる降圧剤は眠気、めまいなどの副作用が生じる薬も多いので、降圧剤を飲んでいる運転者は医師と相談し対策を講じさせる。

アルコールが運転に悪影響を及ぼすことは広く知られているが、個人差はあるもののアルコールは微量でも視機能などを低下させ、判断力や運転操作をにぶらせるので、特に乗務前日の深酒は控えさせる。